

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：21402

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12557

研究課題名(和文) 紀元前一千年紀前半の気候変動期における縄文晩期社会システムの変容プロセス

研究課題名(英文) Transformation Process of Jomon Society in the Early First Millennium BC

研究代表者

根岸 洋(Negishi, Yo)

国際教養大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：20726640

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の目的は、縄文晩期の亀ヶ岡社会が初期農耕社会へと変容したプロセスを、社会システムの変容に着目した多角的視点から捉え直すことである。対象時期は紀元前10世紀から同5世紀とした。本研究ではまず上新城中学校遺跡の発掘調査を実施し、居住域を囲む溝跡の年代を特定して居住システムの特徴を明らかにした。次に鍔田遺跡出土遺物の再整理を行い、またボーリング調査も併せて実施し、遺跡の継続期間と環境変動との関わりについて考察した。さらに縄文晩期後半の土偶・土版の編年を提示し、祭祀システムの変容の実態を論じた。これらの研究成果については単著(2020年)及び成果報告書(2021年)として刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一般に亀ヶ岡文化は精巧な工芸品で知られるが、それらが後半段階に衰退することについて文化的停滞とみなす解釈がなされていた。つまり東北地方における弥生時代の到来は、狩猟採集社会の停滞とセットで捉えられていたのである。これに対して本研究は、縄文晩期後半段階における居住・祭祀システムに着目し、その変容プロセスを明らかにした点に学術的意義がある。特に溝跡の構築が晩期全般に渡り、弥生時代まで継続することが判明したため、今後列島全体を対象とした比較研究へと発展させることが期待される。またこれまで定説がなかった土偶・土版の変遷プロセスについて、鍔田遺跡の層位的情報を加味した新たな編年案を提示することができた。

研究成果の概要(英文)：I aim to study the transformational process from the Final Jomon society to the early agrarian society in Tohoku region from the various perspectives, with a focus on the early first millennium BC (from the 10th to the 5th century BC). Excavation at Kamishinryo Junior-high site reveals the settlement system with a ditched enclosure. Next, I clarified the correlation between chronological sequences and environmental change at a wetland site, Abumiden site, by the study of pottery collections found at 1970's survey and the boring survey in 2020. Furthermore, I discuss the drastic change of ritual system by the study of clay figurines and clay tablets. From the above, I published a single-authored book in 2020, and edited a research report by JSPS in 2021.

研究分野：縄文時代

キーワード：亀ヶ岡社会 狩猟採集社会 居住システム 祭祀システム

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本列島への「稲作農耕の伝播」という歴史的事象について、西日本(特に北部九州)においては、紀元前10~7世紀における朝鮮半島からの農耕民の移住という社会的背景によって説明がなされている。この時期にはいわゆる2.8Kイベントが想定されており、世界的に見た際の気候寒冷期に相当する。縄文/弥生移行期がさまざまな意味で変化の画期となった可能性が高い。

他方、稲作農耕民の大規模な移住が想定されていない東日本の縄文晩期社会では、近年アワ・キビなどの雑穀農耕の流入時期が議論されており、長く続いた寒冷期にあっても同じ社会システムが維持されたのか否か等多くの課題が未解明である。特に亀ヶ岡文化が栄えた東北地方は縄文晩期における一つの核と言える地域であり、後半段階に至るまで遺跡数や居住規模が目立った縮小が見られない。定着型の狩猟採集民によって営まれた亀ヶ岡社会が、いかなるプロセスでその社会システムを変容させたのか、また弥生時代に入ってもなぜ稲作農耕が一部にしか受容されなかったのかは、考古学のみならず関連諸分野にとって関心と呼ぶ研究課題と言える。

### 2. 研究の目的

本研究課題の目的は、地球規模の寒冷期に相当する紀元前一千年紀前半の、縄文晩期の亀ヶ岡社会が初期農耕社会へと変容したプロセスを、社会システムの変容に着目した多角的視点から明らかにすることである。ここでいう紀元前一千年紀前半とは、およそ紀元前10世紀から同5世紀に相当し、考古学的には縄文晩期中葉から弥生前期までの期間を指している。

縄文晩期の東北地方では、精巧な土器や漆製品をはじめとする工芸品で知られる亀ヶ岡文化が栄えていた。その後半段階に物質文化の変容があることから、かつては文化的停滞や社会の縮小が起こったと解釈されていたが、近年は西日本の各地まで亀ヶ岡系土器や漆製品が分布することが指摘され、亀ヶ岡社会と前期弥生社会とを結び交流関係があったことが明らかにされている。離れた地域同士の関係を想定するインタラクティブ・モデルの延長線上に、弥生前期における類遠賀川系土器も位置付けられると言える。

さらに当該期の気候変動についても、年輪年代学などによって高精度に復元され稲作農耕の広がりとの関係が議論されており、亀ヶ岡社会の変容を多角的に問い直す作業には一定の学術的意義がある。

### 3. 研究の方法

#### (1) 居住システムの分析

雄物川下流域における代表的な集落遺跡である、上新城中学校遺跡(秋田市)の調査を実施する。既往調査に伴う出土遺物の再整理を行うと共に、遺跡範囲と年代を再確認するための発掘調査を行う。縄文時代全般を見ても極めて稀な、居住域を囲む木柵列が検出された本遺跡の確実な時期比定を、年代測定学を専門とする研究者の協力を仰いで行い、居住形態が急激に変化した時期と気候寒冷化との関係を明らかにする。

#### (2) 低湿地遺跡から復元する環境変動

多量の炭化木材等の有機質遺物が出土したことで知られる、鏡田遺跡(湯沢市)の調査を行う。1970年代に実施された既往調査成果は一部しか報告されていないため、本研究ではまず出土遺物の再整理と共に、各種自然科学分析を実施する。さらに遺跡の現況を把握すべく現地踏査と測量調査を実施するほか、古環境復元のためにボーリング調査と放射性炭素年代測定を実施する。

#### (3) 祭祀システムの分析

亀ヶ岡文化は土偶をはじめとする土製品・石棒や石刀等の石製品など、多くの祭祀関連遺物が伴うことで知られている。本研究では分析対象を雄物川流域に絞ることで、各細別時期における量的把握を行う。縄文晩期~弥生前期にかけての祭祀関連遺物のデータベースを作成するほか、鏡田遺跡から多量に出土している土偶・土版の編年を行う。

### 4. 研究成果

#### (1) 居住システムの分析

上新城中学校遺跡の居住域を囲む溝跡の年代を特定し木柵との関係を検討することで、居住システムの一要素として位置付けた。また縄文晩期の類似遺構を集成することで、溝跡が前期弥生文化とは関連がなく、亀ヶ岡社会が本来有していた要素であることを明らかにした。この研究成果によって、今後環濠集落の伝播以前の水利施設に関する、列島規模の比較研究へと発展させることができる。

#### (2) 低湿地遺跡から復元する環境変動

複数地点のボーリング調査により、沖積扇状地に立地する鏡田遺跡が、微高地から旧流路跡に該当することを明らかにした。併せて実施した年代測定と層位学的検討により、本遺跡での人類の居住が縄文後期中ごろに始まり、晩期中葉に多量の木材が流れ込むイベントがあった可能性を指摘した。

#### (3) 祭祀システムの分析

鏡田遺跡から出土した土偶・土版の土製品について、層位に基づく新たな編年案を提示し、縄文

／ 弥生移行期における祭祀システムの変容プロセスを論じた。

以上の研究成果は、2020年に刊行した単著(『東北部における縄文／弥生移行期論』雄山閣)と2021年3月に刊行した科研報告書(『紀元前一千年紀前半の気候変動期における縄文晩期社会システムの変容プロセス』)に収録した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 根岸 洋・大上立朗	4. 巻 10
2. 論文標題 東北地方における弥生前期・中期の碧玉製管玉	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 叻	6. 最初と最後の頁 159-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 65. 神田和彦・中村由克・五十嵐一治・石川恵美子・赤星純平・嶋影壮憲・根岸 洋・矢野行一	4. 巻 63
2. 論文標題 雄物川下流域における珪質頁岩の分布調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 秋田考古学	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 66. 根岸 洋・池谷信之・佐藤宏之	4. 巻 33
2. 論文標題 上北・八戸地域から出土した縄文早期の黒曜石製石器群の産地推定と考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学考古学研究室研究紀要	6. 最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Chynoweth, M., Summerhayes, G.R., Ford, A. and Negishi, Y.	4. 巻 59(1)
2. 論文標題 Lapita on Wari Island: what 's the problem?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian Perspectives: the Journal of Archaeology for Asia and the Pacific	6. 最初と最後の頁 100-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1353/asi.2020.0009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 根岸 洋	4. 巻 10
2. 論文標題 弥生時代前半期における『津軽海峡文化圏』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要	6. 最初と最後の頁 37-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24687/iasrc.10.0_37	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根岸 洋	4. 巻 160
2. 論文標題 東北地方北部における縄文 / 弥生移行期論の枠組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 出羽路	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根岸 洋・國木田 大	4. 巻 62
2. 論文標題 上新城中学校遺跡2018年度発掘調査の概要報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 秋田考古学	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根岸 洋	4. 巻 -
2. 論文標題 二枚橋式期の再検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第20回北アジア調査研究報告会発表要旨	6. 最初と最後の頁 73-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根岸 洋	4. 巻 -
2. 論文標題 上新城中学校遺跡	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 平成30年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根岸 洋・齋藤 努・森田賢司	4. 巻 27
2. 論文標題 二枚橋(1)遺跡出土青銅塊についての考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青森県考古学	6. 最初と最後の頁 97-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 根岸 洋
2. 発表標題 弥生時代以降における『津軽海峡文化圏』とは
3. 学会等名 令和元年度土曜セミナー（青森県立郷土館）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 根岸 洋
2. 発表標題 柵に囲まれた縄文集落を掘る 秋田市上新城中学校遺跡
3. 学会等名 仙台市縄文の森広場縄文講座（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 根岸 洋・西村広経・隈元道厚・関根有一朗・國木田 大
2. 発表標題 上新城中学校遺跡における縄文晩期後半の溝跡（木柵跡）とその評価
3. 学会等名 日本考古学協会第86回総会研究発表
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 根岸 洋
2. 発表標題 二枚橋式期の再検討
3. 学会等名 青森県考古学会公開講座「遺跡が語る下北の歩み」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 根岸 洋
2. 発表標題 民族考古学からみた縄文時代のネットワーク
3. 学会等名 『平成30年度 博物館特別展「縄文と沖縄- 火焰型土器のシンボリズムとヒスイの道」シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 根岸 洋
2. 発表標題 祭祀用具の変遷からみる紀元前一千年紀の岩木川流域
3. 学会等名 平成30年度青森県立郷土館企画展「新説！白神のいにしえ」関連行事・土曜セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Negishi, Yo., Kennichi Kobayashi and Masataka Hakozaiki
2. 発表標題 Settlement Dynamics on Climate Change in the Final Jomon Period.
3. 学会等名 Jomon Transitions in Comparative Context: complexity, materiality, ritual and demography among prehistoric complex foragers in Japan and Europe (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤宏之・根岸 洋
2. 発表標題 男鹿の丸木舟：磯漁の聞き取り調査から
3. 学会等名 「3万年前の航海徹底再現プロジェクト」研究会～丸木舟について考える～
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Jomon Transitions in Comparative Context: complexity, materiality, ritual and demography among prehistoric complex foragers in Japan and Europe.	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------